労働者協同組合はまだ法律がありません。現在はNPO法人や企業組合法人を使っているのですが、労働者協同組合の法人を認めさせ、もっと社会に開かれたものとして認められるようにしていきたいと思います。

2012年には教育特区で、ワーカーズコープが母体となって協同組合理念と協同組合運営方式で学校をつくりたい、と個人的な夢として思っています。

最後に

村上龍の『13歳のハローワーク』(幻冬社)の「NPOに就職すること」から抜粋をします。

> 「成功というのは、大きな会社に入って出世し、金持ちになって大きな家に住むことではない。そのことに多くの人が気づくようになるだろう。仕事に充実感を持つことができて、社会的に価値を認められ、豊かな人的ネットワークを持つこと、それがこれからの成功の基準だ。日本のNPOは、人間で言えば、まだ赤ん坊のような未熟な状態にある。だから、チャンスなのだ。NPOで必要とされる知識や技術はほとんど無限で、金融から宣伝、医療や環境から芸術まで、どんな分野であれ、専門家は常に求められている。会社の知名度や実績にこだわって就職活動を続けるか、知識と技術を磨いて起業を考えるのか、または信頼しあえる対等な関係の仲間たちとNPOを立ち上げるのか、働き方の選択肢は一つだけではない。」

山一證券や北海道拓殖銀行が破綻したり、大企業が倒産するという現状があります。その中で企業が、もっと言えば雇用労働だけが働く場ではないな、と思っています。

私自身の労働観は「お金をもうけるため」だけではなく、社会の中で自分自身が役に立ちたい、一人一人が主体者となって協同して自治的な社会をつくりたいというものなので、本当にこの組織でこの仕事に出会えたことに幸せを感じています。今後も挑戦することを忘れずに、一歩一歩頑張っていきたいと思います。

自立した人間どうしが協同し合うことで社会の中で新たな可能性を生み出すのかな、と思っています。

働きながら夢を追い続けたい

古賀直子
(ワーカーズコープ：足立青井地域福祉事業所)

ワーカーズコープで働いている古賀と申します。私が働いているのは、足立区にある学童保育室です。今、足立区の中にはワーカーズコープが運営している学童保育が4カ所あります。スタッフは20代前半の人が多く、一緒になって4カ所を立ち上げてきました。今、私はその4カ所の所長をしていますが、とても所長とは言えない頼りない人間です。

私はワーカーズコープで働き始めてまだ2年半くらいで経験もないのですが、私がワーカーズコープで働いていて、感じていることを事例を交えながらお話します。

学童保育室ができた経緯

足立区でワーカーズコープの学童保育室ができた経緯をお話します。私たちが運営している学童保育室は、小学校の1～3年生くらいの子どもたちを、毎日学校が終わってから預かっています。4ヵ所の内、最初に立ち上げたのが青井にある「わくわくクラブ」です。2002年に足立区の保育園の民間委託に応募して、企画提案をしたのですが残念ながら落選しました。でも、その企画提案をしたことが、わくわくクラブの設立につながります。足立区では商店街で増えている空き店舗を活用して何かできないか、ということで、待機児童も多いことから、学童保育をつくったらどうかという話がありました。そこでワーカーズコープが手を挙げて、2003年の足立区コミュニティ施設活用商店街活性化事業の助成金を利用して「青井わくわくクラブ」は始まりました。

そこから、2004年に区の委託事業で小学校の中にある中島根学童保育室、今年度は東和わくわくクラブ、谷中わくわくクラブが立ち上がりました。

学生時代の私

私は、学生を終えてすぐにワーカーズコープに就職しました。学生時代の私は、あまり学校にも行かず、やりたいことは何となくあったのですが、それを仕事につなげたり就職したいという気持ちにはとてもなれませんでした。それよりも、社会に出て自分に何ができるのか、できることがあるのか、ということが全然わからなくて、自分が社会に受け入れられなかったらどうしようという恐怖感みたいなものがあったんです。要するに自信がなかった。

ワーカーズコープとの出会い

卒業してフラフラしているのもまずいんだろうな、と思いながら家でごろごろしていたら、区の広報紙に学童保育室が新しく商店街にできるというお知らせがありました。子どもが好きだったので、「学童保育室って何だろう？」と思いながら、何となく応募してみました。

私の学童保育へのイメージは、怖いおばさんがいて（笑）、上下関係があるようなイメージがあったんで、新しくできたところなら、いじめられることもないかな（笑）、と思って応募をしました。そこでワーカーズコープに出会って、自分たちで出資をして経営までするという働き方を知って、「そんな働き方があるんだ」とは思いつつも、まさか自分でそんなことをするという実感はありませんでした。二次面接まであったんですが、人と話すのも苦手だったので「落ちるな」と思っていたのですが、なぜか最終的に3名のスタッフの一人として非常勤で採用されました。

ワーカーズコープの働き方

青井わくわくクラブは、足立の学童の待機児童の解消と、働く親の子育て支援そして商店街の活性化を目指して開所されるということでした。実は、学童の指導員になっ

たのはよいのですが、私は学童に行ったことがなかったので、どういうことをするのかわからなかったんです。「学童って何？」という何もわからないところから立ち上げの準備が始まりました。

私は絵を描くことが好きだったので、「とりあえず看板を今日中に作れ」ということで、ベニヤやペンキを買ってガタガタ言いながらやりました。出来上がったら大したものではなかったんですが、「上手じゃん」と言われて、あんまりほめられた経験がなかったので、自分がやったことが人に認めてもらえてすごく嬉しかったんですね。

学童といっても、もつ焼きやさんと美容室の2店舗をぶち抜いて作ったので（笑）、真ん中に柱があるだけで、他に何もなかったんです。家具や食器もひとつひとつ買うところから始めて、カーテンを用意したり下駄箱を作ったりというところから皆で準備をしてきました。また、新しい学童だったんで、募集チラシを作らなければいけないということで、何千枚か作りました。本当に自分たちで何にも形のないところから一つずつ作っていくのは、大変だけど面白いなと初めて感じました。

スタッフが3人いたんですが、3人とも学童の指導員の経験がなかったんですね（笑）。モノは揃ったけれども、次に「保育はどうしよう」ということになりました。これはまずいんじゃないか、ということで、まず「どういう子どもに育てたいのか、どういう学童にしたいのか」という保育目標を立てようと3日間くらい話し合い、そこからケンカになったりしました（笑）。準備の期間は本当に苦しいことばかりでした。

それから、ワーカーズコープということで経営もしなければならないのですが、経営以前にまず伝票のつけ方もわからなくて、すごく苦労をしました。大変だったんですが、一緒にやっていたスタッフと周りで助けてくれた人たちが同じことを何度でも一つずつ丁寧に教えてくれました。

当初非常勤で採用されたのですが、正直ここだけでは生活ができない給料だったので、私は教員免許があったので同時に高校の臨時講師も始めました。講師の仕事も初めてだったので仕事を覚えなければならなかったのですが、学童の立ち上げとは違ってマニュアルをポンと渡されて、「これ読んで、ハイやって」という感じで、「何か違うな」とその時感じました。

青井わくわくクラブの開設

大体2ヶ月くらいの準備で何とかオープンしましたが、30人の定員に13人しか集まりませんでした。ただ、私たちは足立区からの補助金で運営費などをまかなっていたので、21名以上集まらないと補助金を半額くらいしかもらえず、人件費も出ないし本当に「どうしよう」と、そのとき初めて経営に責任を持たなければならない、という自覚が出てきました。このままではいけない、と再度チラシを作って、毎週商店街の朝市や夕市に子どもたちを引き連れて行って、「撒けーっ」と皆で撒いたり（笑）、いろんなところで宣伝をしました。

また、学童の仕事だけでは収入が足りないから、何でもやってみようということで、自分たちで電卓をたたきながら料金を決めて一時保育をやってみたりしました。

何でも言える・受け止め合える関係づくり

ワーカーズコープには上下関係も常勤・非常勤の違いもないので、自分の思っていることを言えるし、言わないとやっていけないところもあって、それがすごく大事だなと思ったんですね。言いたいことをお互いが言うだけでなくて、相手が言ったことを受け止める姿勢を持つことが、すごく大事だなということを働きながら感じました。

一つ一つの意見を受け止めてもらい、自分が認められているという嬉しさ私の中ではすごくあって、そこから少しずつ自信がついてきました。今まで自信なんて全くなかったので「自分が変わってきたな」とそのくらいの時期に感じました。

そんなことで、少しずつ子どもたちが集まり始めて、だんだん人数が増えて、いろんな子どもたちが来ると、経験もないし子どもたちをまとめることもできなくて、しっちゃかめっちゃかになってしまったんです。本当に「保育というのは難しいな、大変だな」と3人とも感じていました。

子どもたちとの出会い―二つの事例

大変だった事例を挙げます。その当時入ってきた3年生の男の子は暴力がひどくて、運悪く一緒に入ってきたいじめられっ子をサンドバッグみたいにボコボコやっているんですね。私が怒って、「やられた子の気持ちを考えたことがあるのか」と言うと、「人なんか関係ねぇんだよ」という一言が返ってきて、すごくショックを受けたんです。人の気持ちを考えないとか、自分がやられた時だけ何か言うということでいいのか、とその日からその子との闘いが始まりました。最初は蹴られたり殴られたり、毎日フウフウ言いながら家に帰ったんですが、それでも私たちは絶対に「こうしなさい」とは言いたくなくて、保育の経験がないなりに「何でそういうことをするのか」というところから考えよう、と思ったんです。それで、1年くらいかかったんですが、ピタッと暴力がなくなりました。今まで、蹴られたり殴られたり本当に嫌な奴と思っていたんですが、それからその子のいい面が前に出てきたんですね。そうしたらその子自身も落ち着いて楽しそうに毎日遊ぶようになって、「変わったなあ」と思わず泣いてしまいました。

それから、学童から逃げ出しちゃう女の子がいました。まず来ないので学校まで迎えに行くと裏口から逃げるんですね。で、「見つけた！」と走っていくとその子も走って逃げる。私はあまり体力がないのですが、それでも「待ちなさい！」と追いかけると、ランドセルを捨てるんです。私はそれを拾いながら追いかけていくと、金網があってそれをよじ登るんです。仕方なく私もよじ登って（笑）、ようやく捕まえて肩に担いでわくわくクラブまで2人で泣きながら帰るんですね。その子も逃げるには逃げる理由があるんです。3ヶ月くらいしてから、同じ学童の子で嫌なことをいう子がいるということを言ってくれて、その子と3人で話したんです。そうしたら、お互いを誤解していた部分もあって、それ以降だんだん落ち着いてきて、逃げずに学童に来るようになりました。それを見たお母さんが、「うちの子がこんなに楽しそうな顔をしているのをはじ

めて見た」と泣きながら言うんです。全然しゃべらなかったんですが、今ではうるさいくらいにしゃべる子になって。それは私たちがやったおかげとかではなくて、その子自身が変わろうと思ったから、今明るくしているんだろうな、と思います。

指導員は3人が、毎日奮闘して、何度も話し合いをして、親を呼んで個人面談をしたり、電話をしたり、わからないなりにやってきました。私たちは学童のことも教育のこともわからないんですが、やはり子どもの思いや保護者の要望には、「“できない”と言わないで全部やっていこう」という話をしたんです。3人とも気が強くて、「できない」と言いたくなかったんですね。絶対無理でも「何とかしよう」とその度に話し合いやケンカをしながら親の要望に応え、子どもの気持ちにも寄り添って保育をしてきました。

保護者、地域の人びととの出会い

でも、子どもや親と真剣に向き合うことで、私たちの思いが親にも伝染して、親の方から「わくわくの父母会をつくりたい」と言ってくれたんです。指導員も父母会の役員になり、ワーカーズコープのように一人一票の権利があって、意見をどんどん言って、一緒に子どもたちにとってよい学童をつくっていこう、成長を見守っていこう、という思いで父母会を立ち上げました。先日、父母会の１年目の打ち上げをやったんですが、その時に父母会長さんから「先生たちは若いし、経験もないし、頼りないと思った。でも頼りないけど、先生たちが保護者の思いを受け止めようとする姿勢が私たちの気持ちを変えた。だから父母会をつくろうと思ったんだ」と言ってくれたんです。それは嬉しかったですね。

親に伝わると、地域に伝わるんですね。私たちの学童は商店街の中にあるので、商店街の人たちとの交流も深まってきました。最初は、「こんなところに学童ができて、子どもはうるさいし」という感じだったんですが、仕入れをして、値付けをして、売って利益がいくら出たかというところまでやろうという「子ども商い体験塾」の行事を商店街の人と一緒にやったら、今まで無視をされていたような店主さんたちが、「大丈夫？」と心配してくれるようになって、変化が生まれてきました。すると地域の中で「子どもを見守ってくれている」という安心感が私たちの方にも出てきました。

ワーカーズコープ足立学童４ケ所開設へ

そんな感じで、地域でどんどん広がっていく中で、青井わくわくクラブも2年目は定員オーバーとなり、区から「もう一つの学童をつくろうと思っているんですが、ワーカーズさんでやりませんか」と打診がありました。それで中島根でもう一つ学童を立ち上げました。3年目の今年度は「さらに2ヶ所立ち上げないか」という話が来て、「やろう」となったのですが、区は「場所がないので自分で探してください」と言います。学童ができる場所というのは条件が限られていて、広くて、子どもが見渡せて、学校からも近く、安全で公園も近い場所ということで、本当に苦労しました。１ヶ所はすぐに見つかったのですが、もう1ヶ所が地域住民から猛烈な反対を受けました。頭を下げて回っ

たのですが、「こんなに反対されてまでここでやる意味があるのかな？」という話し合いをして、振り出しに戻りました。その時に「ワーカーズコープを辞めたい」と言っていた若いスタッフの一人が、地域住民の反対に圧倒されている私たちを見て、休みの日に歩いて物件探しをしてくれたんです。そのおかげで場所も見つかり、2ヶ所の立ち上げができるようになり、その人も気持ちが変わって、今、現場責任者をやってもらっています。ここで働いていて、いろんな経験をしながら、皆が一緒に成長しているな、という実感が持てています。

一人ひとりが主人公

しょっちゅう意見の違いでケンカをしたりとか、辞めたいとかということもある中で、目指していることは、「よりよい学童をつくる」「子どもが楽しいと思える学童をつくる」「保護者が安心して働ける学童をつくる」ということなので、そういう意味では皆一つの方向に向かっているんだな、と実感しています。仕事に対して自分たちで責任を持つというのが、若い人にとってはプレッシャーで、本当にそれに押しつぶされそうになったことも何回もあるんですが、それ以上に仕事に対してのやりがいや、一人ひとりが学童の指導員としての誇りを持っているんです。それは実践の中でそれぞれが感じているからこそ自信を持って言えるんだと思います。

知的障害者の3級ヘルパー講座から学んだこと

ワーカーズコープでは、学童だけの仕事をしていればいいのではなく、地域の人が望んでいることに応えていくのが仕事です。だから、やっぱり学童だけの仕事ではなく、他の仕事もしていこうということで、知的障害を持った方の就労支援で3級のヘルパー講座をやってみようということになりました。そうしたら、21、22歳の一番若手の非常勤のスタッフが「自分たちがやりたい」と言ってくれるようになったんです。その人が書いた講座を終えての感想を読ませてもらいます。

「障害者だけの世界でなく、さまざまな人と出会い、地域の中で知的障害を持つ子どもたちのいいところ、明るさ、素直さ、手を抜かない真剣さを発揮し、社会参加と就職の可能性を広げたいと思い、足立区の委託事業として講座を企画し運営してきました。

4ヶ月という長い期間でしたが、3月12日の修了式では32人全員の受講生が修了証書を受け取ることができました。専門的で難しい知識や技術の習得に時間がかかったり、厳しい面があるのは事実ですが、まわりの人にパワーや元気を与え、いつの間にか笑顔にしているという不思議な力。知的障害の方だからこそのよさというものもたくさんあります。そのことを発信するのも私たちの役目だと感じています。講座修了後、資格取得だけを目的・ゴールとするのではなく、地域の中で支えあい学びあう関係を広げること、つなげることにさらに重点をおきたいと考えています。大変だったけどみんなが集まった時には、大きな力の可能性を感じました。」

昨年に続き今年度も第2回の講座を開講するということで、今その人が中心になって企画書から準備を進めています。

それから、商店街の人たちに衣装作りや大道具は協力してもらって、子どもたちや地域の人たち皆で劇団をつくろうという話がスタッフの中から出ています。始めは、学童の指導員だけやっていればいいんだ、という感覚から、いろんなことに挑戦しようという意識が出てきているのは、ここで働いているからこそなのではないかなと思っています。

ワーカーズコープで働いてからの私

私の夢は絵描きになることでした。できれば海外で展覧会を開いて、世界のいろんな人に見てもらいたいと思っていたんですね。でも、学生の時の自分は心も体も閉じこもっていて、「そんなことできるわけない」と決め付けていました。仕事をするようになってから、自分自身が変化し成長したな、というのを感じています。今までだったら引きこもったり、自分が世の中に必要とされていない人間なんじゃないか、と思ったりしていたんですが、いい面だけでなく弱い面や嫌な面の自分も受け入れてくれる場所が、私にとってはこのワーカーズコープで、それが自信につながって、いろいろなことに挑戦しようという気持ちになれたんですね。そうしたら不思議なことに、描き続けてきた絵をたまたま海外の展覧会に出すチャンスがあって、そこから一気に広がって、今では毎月展覧会をやるようになり、今年も3回展覧会で海外に行っています。

今までだったら絶対にできないと頭から決め付けていたことが、意外と難しくないんだな、と感じられるようになったのは、やはりここで働いていたからじゃないかな、と思います。

参加者の感想

●ワーカーズコープ、良いなと思いました。働き方に迷っている一人の若者として、いろんな道を知りたい、考えたいと思いました。学校ではなかなか「つながる働き方」はできないのかな？ありがとうございました。

●古賀さんの体験報告はまさにヒット！やりたいことを言論に対するアンチとして相当説得力を持ち得る気がする。さらに言えば、ここで出てきたつながりの意義を既存企業でどこまで可能なのか、ということも考えたくなった。報告とは違った形で存在はしてると思う。より狭められつつあるとしても。

●とても面白かったです。午後からの参加でしたが、来て良かったなーと思いました。私も社会で働く自信もなく、周りにもそんな人が多かったので、その問題を考えようと院に進学しました。音楽が好きだけど夢にしたままでいるという知り合いに何と言おうか迷っていたので、古賀さんのような生き方もあるんだと伝えてみようかと思いました。また、私自身教師になるか迷っていて、しかしNPOなどの収入は気になるところでしたが、ますはそういった団体の実体や情報が欲しいなーと思いました。ありがとうございました。

（『第43回全進研大会「速報」つなぐ』より）

*　全国進路指導研究会（全進研）は、1963年に創立され、それ以来、「競争の教育・選別の進路指導」を批判しながら、「子ども・青年の発達を保障し未来をひらく進路指導・進路教育」の実践をきりひらき、展望を示してきた民間教育団体です。

全進研の会員は、小・中学校・高校の教職員、研究者、父母が多いのですが、養護施設の仲間や地域の学習運動の担い手たちも積極的に参加し、また、最近の大会、学習会には学生・生徒・働く青年の参加が目立っています。

（全進研ホームページ：
http://homepage1.nifty.com/zenshinken/より）